



TITLE:

『青白い炎』: 見えない三人と見えすぎる一人

AUTHOR(S):

皆尾, 麻弥

CITATION:

皆尾, 麻弥. 『青白い炎』: 見えない三人と見えすぎる一人. Zephyr 2002, 16: 39-47

ISSUE DATE:

2002-11-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/87598>

RIGHT:

『青白い炎』

——見えない三人と見えすぎる一人——

皆 尾 麻 弥

仮に『青白い炎』(*Pale Fire* (1962))を映画化した時に、全編通して顔を一度も見せずに終わってしまうであろう主要登場人物が少なくとも三人いる。ヒュー・ウォレン・ゴールズワース (ゴールズワース判事)、シャドウズの指導者、そしてジョゼフ・S・ラヴェンダーの三人である。ウラジーミル・ナボコフの『青白い炎』を読んで経験する不可解な要素は数限りないが、この姿を現さない三人の隠されたままの顔も、読後の印象に不可思議でかすかに不気味な三つの穴を残して行く。

顔が見えない登場人物というのを具体的に説明すると、語り手キンボートが実際には会ったことのない人物 (ゴールズワース判事)、キンボートが覚えてその顔を仮面の下に隠したままにして語ろうとする人物 (シャドウズの指導者)、そして電話の向こうの声のみでしか登場しない人物 (ラヴェンダー)であり、したがってキンボートの語りと視点だけを元にした場合、読者にはその顔を映像化する機会が与えられない、そのような登場人物である。

一方で、顔が見えすぎるところか内臓まで透けて見えてしまう人物グレイダス (あるいはジャック・グレイ)がいる。キンボートはグレイダスに限りなく接近し、大写しにし、体内に、思考に踏み込みながら彼のことを描写する。この二つの対照的な人物の見え方が何を意味しうるのか、考えてみたい。

語り手であるゼンブラからの亡命者キンボートが、ニューイングランドの町ニューワイで借りることになったのがゴールズワース家である。実際のところ、ゴールズワース判事の顔を一瞬だけ目にすることができる。それは壁

に掛けられたゴールズワース夫妻の写真なのだが、それもたちまちキンボートによってピカソの絵に取って代えられてしまう。それ以外は、彼は研究休暇でイングランドに行ったままこのテキスト内で姿を現すことはない。さらに、登場人物を事細かに載せているキンボート作の索引に彼の名の項がないことは、非常に奇妙である。しかし、不在であるにもかかわらず、ゴールズワースの存在はどういうわけか重みを持って感じられる。彼のイメージは、例えば「判事が自ら投獄した者たちあるいは死を宣告した者たちの事例報告と写真とを愛情込めて貼り付けたモロッコ革張りのアルバム」(69) や、「ゴールズワース判事の法服が犯罪社会 (the underworld) に投げかける恐るべき影」(71) のうわさなどの描写によって、読者の内に多少の畏れを伴って形成される¹⁾。また一方で、たいへん几帳面な家事仕事担当者としてのゴールズワースの姿も浮かび上がっては来るのだが、それでも彼の存在は相変わらずキンボートからも読者からも遠いままである。

さて、判事の「恐るべき影」のうわさを聞かされて、脳裏にその影がちらついている読者は、別の影たちが影絵のようにちらつく場面に行き着く。それは逃亡中のゼンブラ国王 (キンボート) の暗殺を企てる過激派グループ、シャドウズ (the Shadows) を紹介する語りである。彼ら「たちの悪い殺し屋」は、「言ってみれば、自分たちを一生牢獄暮らしにさせるような供述をした、手出しできない所にいる紳士をひどい目にあわせてやりたくてたまらない悪漢ども」(121) である。この説明はちょうど、ゴールズワースの恐るべき影のうわさに続く部分、「牢獄に横たわり raghdirst (報復への渴望) で死にかけているろくでなし」(71) と重なりそうである。「報復」とは、死刑を含めた判決を下す判事への復讐であろう。つまり獄中の「ろくでなし」を復讐心に駆り立て、導く本人はある意味で “leader” であり、それがゴールズワース判事である。実際、グレイダスが判事によって精神病院に入れられた殺人狂ジャック・グレイだとすれば、彼は詩人ジョン・シェイドを判事と間違えて撃ったわけであり、彼をその行為へ導くのはゴールズワースだと言える。

一方、シャドウズの“leader”、指導者というのは実に不気味で謎めいた存在である。この人物についての言及は索引中にしかないのであるが、それだけにいっそう気になる存在である。キンボートは索引の「シャドウズ」の項で、「指導者の恐るべき名前を出すことはできない。たとえ一学者のマイナーな作品の索引中であっても」(246)と語る。その後、指導者の母方の祖父の話が七行ほど続くが、なんとも中途半端で思わせぶりの言及であり、読者の頭にはこの指導者の不吉な、顔の見えない黒い影がつきまとうのである。

シャドウズはゼンブラ国王（キンボート）の命を狙う組織だが、ゼンブラから亡命して「ゴールズワース城」(79)に一人住むキンボートは相変わらず「影」の存在に、「お化けの殺し屋」(79)に、命を狙われているという恐怖、つまり死の恐ろしい影におびえ続ける。その影の代表がグレイダスであり、キンボートは彼をこもりのような姿をした「運命」(110)として描く。シャドウズ、そしてグレイダスとはキンボートを追う「運命」そのものと言える。ではそのキンボートの「運命」をあやつるシャドウズの“leader”とは誰か。単純に考えればそれは最も超越した存在の“judge”、天にいる裁判官ではないか。そういう意味でも、ゴールズワース判事(judge)とシャドウズの指導者は重なり合う。ゴールズワースはこの世で犯罪者の運命を決める裁判官であり、キンボートの生命を左右するシャドウズの指導者は特に理由もなく無条件に人の運命を決める、より高位の(あの世の)裁判官、つまり限りなく神に近い存在である。そう考えると、シャドウズの索引項目中で、この索引の中で指導者の名は出せないと書かれていることと、この本の中でどう考えても重要な人物であるゴールズワース判事の名前の項がないこととは、奇妙に関連しているように思えてならない。ゴシック(Gothic)じみた組織であるシャドウズの、灰色の(gray)人生を送るグロテスクな(grotesque)グレイダス(Gradus)(121)、そしてゴールズワース(Goldsworth)というように、Gのつながりも見逃せない。また、“Goldsworth”の中に“God”、「神」の文字が隠れているのは偶然であろうか。さらに、既に引用した「ゴールズワース判事の法服がthe underworld

に投げかける恐るべき影」の the underworld は、「犯罪社会」であると同時に「黄泉の国」と読むこともでき、そうなるとますますシャドウズの指導者と見分けがつかなくなってしまう。こうしてみると、『青白い炎』を映画化した場合、この二人は一人の役者が一人二役で演じてもよさそうである（と言っても出番があるのかないのかははっきりしないが）。

次にもう一人の顔の見えない人物、J.S. ラヴェンダーについて考える。彼が登場するのはグレイダスによる追跡の一場面である。グレイダスは画商に扮して、アメリカ人のラヴェンダーからなんとか王の行方の手がかりをつかもうと、ジュネーヴの近くにある彼の別荘にやって来る。しかしラヴェンダーは不在で、わずかに電話を通して声が聞こえるだけである。この、グレイダスがラヴェンダーの別荘を訪問するエピソードで注目したいのは、これがグレイダスのアメリカ到着、続くゴールズワース家への接近の場面と、鏡像になっているという点である。このことは例えば、グレイダスに別荘への道を示す「三人の石工の三本の人差し指」(157)と、キンボートがいるはずの大学図書館をグレイダスに指し示す「三人の学生」(220)のそろった指という共通のイメージにも表れているし、ダーク・ヴァネッサという蝶の出現も、両場面を結ぶ共通要素であるが、私が最も印象的だと思うのは、聴覚的要素の一致である。ナボコフの小説を読む場合、目を凝らすだけでなく耳を澄ませておく必要もあるとよく感じるのだが、ここでも私たちは細かく視覚化するだけでなく、耳で実際に音を聞けるように聴覚化しながら語りを味わうべきである。

耳を澄ましていると、ラヴェンダーの別荘のエピソード中おそらくずっとグレイダスの耳を通して聞こえているのは、例の道案内をした石工たちがたてるキンキンコンコン (clink and tinkle) (161) という遠い音である。一方、グレイダスが(ゼンプラ王を追って?) ゴールズワース家へ向かっている時に聞こえているのも、この音にそっくりなチリンジャリン (tingles and jingles) (225)、カランコロン (clink-clank) (227) という音である(シェイドの詩では “Click. Clunk”) が、これは蹄鉄投げの音である。このキン

キンカランコロンという遠い耳鳴りのように続く響きはまるでグレイダス登場時の効果音のようである（他に「ガリンガリンバシンバシンという建築工事」（198）の音と共に登場する場面もある）。この鏡像になった二つの場面からは、不在のラヴェンダーとゴールズワースが対応しているように見えるが、同時に J. S. ラヴェンダーの JS はジョン・シェイドの頭文字でもあり、また彼が集めている「芸術品風の写真」（157）はフランス語で *ombríoies* と呼ばれており、これも「陰」、つまりシェイドを想起させることなどから、彼はどちらかといえばジョン・シェイドと対応する人物のようである。例によって映画化の話に戻すと、ラヴェンダーの電話の声はシェイド役の役者が演じてもよさそうである。

さて、これら顔の見えない極端に遠景の人物らの前に常に見えている（そして語りが進むにつれて次第に大写しになって行く）グレイダスについて考えてみたい。キンボートは彼のことを、嫌悪と軽蔑をこめて非常に意地悪に語っている。グレイダスはキンボートの運命の使者として描かれるが、キンボートによれば同時に、グレイダスを動かしている「力」は、「シェイドの詩自体が持つ魔法の作用、その韻文の推進力とからくりと、力強い弱強格のエンジン」（110）である。グレイダスは「詩のリズムという道を進み、韻を越え、追いこみの角をすいとすべり、行間休止で一息つき、行から行へと渡りながらページのふもとに下り、新たなカントの地平線に再び姿を現し……夜が来て詩人がペンを置くと眠りにおちる」（65）。グレイダスはぜんまい仕掛けの人形のイメージで語られることもあるが、そのぜんまいを巻く鍵がシェイドの詩をつむぐペンなのであろう。

ここに引用した、シェイドの詩の文字に寄り添うようにして進んで来るグレイダスのイメージは、まるでシェイドの書く英語の文字にできる影の様である。キンボートの頭の中で、シェイドの詩の文字には、ちょうど夕日があたるように影ができる。それがシャドウズのメンバー、グレイダスのイメージなのではないだろうか。そしてこれが意味するのは、外国語と母国語の関係ではないかと私は推測する。キンボートの母国語はとりあえずゼンブラ語

(それがどのようなものであろうと) であり、英語は、完璧に操ることができるとはいえ、彼にとっての外国語である。外国語の文章を読むとき、私たちはそれを母国語に変換したものを同時にうっすらと意識する(あるいはほとんど意識にのぼらないかもしれないが)。その、外国語の文章に寄り添ってかすかに認識される母国語は、まさに「影」のイメージそのものである。シャドウズ(影党)のグレイダスとは、キンボートがシェイドの詩を読む時に絶えず執拗に思考の中に現れる、母国語の訳語の姿なのではないだろうか。それはキンボートに一生つきまとう「運命」、つまり彼の背負う「祖国」という運命の、一形態だとも言える。グレイダスのことが語られる時にいつも言語や文字が話題になるのもこのことと関連があるのではないか。

例えば、ラヴェンダーの別荘でグレイダスは「まず並のフランス語で、次にそれよりもお粗末な英語で、しまいにはまずまずのドイツ語で」従僕に質問する(158)。彼の母国語も普通に考えればゼンブラ語であるから(彼がジャック・グレイというアメリカ人であるという説はこの際忘れて)、使える言語もキンボートと一致している。また、グレイダスとシャドウズ本部との間で交わされる、しまいには双方とも理解できなくなってしまう、暗号を使った電話での会話のエピソードも、グレイダスと言語のとてつもなく滑稽で同時に悲劇的でせつないような関係を表している。さらにグレイダスは「新聞、パンフレット、偶然入っていたチラシ、鼻炎ドロップや胃腸薬についてくる多国語の刷り物の貪欲な読者」(184)であり、ニューヨークタイムズの記事を読んでいるグレイダスの場面では、キンボートがグレイダスの目となって(あるいはキンボートの目がグレイダスの体を借りて)細かく記事を追ひ、それを羅列していく。ここではキンボートとグレイダスは一体化しているように感じられる。

ゼンブラ語(それが何であれとにかくキンボートの母国語)という、自らの思考に住み続け、身体に染み込むように知り尽くしているもの、そういう意味でのキンボートの運命をグレイダスは体現しているようだ。キンボートはアメリカに来て、ゴールズワースの家に住み始めた最初の春、「木々に宿

る新しい命が、私の頭の中に宿る古い死のパチパチいう音を冷酷に真似る」(79) のを聞くのだが、この「新しい命」を「英語」と、「古い死」を彼の「母国語」と読み替えてもいいかもしれない。さらに、「木はゼンブラ語で *grados*」(77) であることを考えると、ここでのグレイダスの存在がよりはっきりする。

このように、グレイダスはキンボートの内にある（「私の中にいて、容赦なく進んでくる暗殺者」(79)）、母国語のようになじみ深く、知り尽くした存在のように見える。このことはキンボートがグレイダスの身体に入り込むようにして、ほとんどグレイダスの目を通して、グレイダスになったつもりで語っているように聞こえる多くの場面にも表れている。この語り方はナボコフの別の小説、『賜物』の中でフォードルが他人の魂に入り込み、その人物になりきってしまうという想像行為に似ている²⁾。彼はそのようにしてコンチェイエフと会話し、そのようにして父親のことを語る。父親のことを語るとき彼は、父を示す主語を *he* から *we* へ、そして *I* へと変化させる。これはフォードルが父の身体に乗り移って語る過程を表すが、やがて最後には *I* で語ることをやめる。その理由はアレクサンドル・ドリーニンが指摘するように、父親になりきって語るということは父親の人格に対する冒瀆であり、父親の「個」の神聖さを大切にするべきだということにフォードルが気付いたためである³⁾。

それに対してキンボートは、グレイダスの（あるいはジャック・グレイの）人格を尊重しようなどとは思ってもみない。グレイダスはあちこちの土産物屋でガラスの小さな動物を手にとって眺めるが、皮肉なことに彼自身がそれらガラスの動物たちと同じくらいに透明なのだ。キンボートにとってグレイダスは透明でなければいけない。その内部が容易に透けて見え、その中に容易に入って外を眺めることができるように。物語が進むにつれて、グレイダスはより近く、より透明になり、内臓まで透けて見え、キンボートを通して私たちまでその透明な身体をすり抜けていくことができる。このグレイダスの異常な見え方は、顔の見えない三人の人物たちの見え方と実に好対照

である。

キンボートはグレイダスを、自分の母国語のようになじみ深く知り尽くした、よく理解しているもの（そしてある程度支配できるもの）として描き、そうすることによって「灰色の人生」を送るグレイダスの形を借りた自分の灰色の運命を凝視し、監視し、把握しようとする。グレイダスのことを語る時、キンボートにはグレイダスという他者に対する敬意などなく、あるのは軽蔑と驕りである。それは自分の運命に対する嫌悪と軽視、そして自分の運命の仕組みはよく分かっているという傲慢と、ジャック・グレイという一つの人格に対する傲慢と軽視の表れである。グレイダスという人物の中身などキンボートにはどうでもよい。ただ彼の身体を借りて、その身体に自分の運命を演じさせることができさえすればよいのだ。キンボートには自分の運命の大まかな流れを変えることはできない。そういう意味でグレイダスという名の運命を支配することはできないが、グレイダスの細部は、語りを通して支配することができる。例えばグレイダスに下痢をさせ、さらに「よく冷えた牛乳を紙のコップに二杯」（220）飲ませてもっと状態を悪化させてやることぐらいはできるのである。

キンボートはグレイダスに接近し、その体内に入り込み、冒瀆し、運命を演じさせる。彼にとって運命とはその程度の、分かりやすいものでなければならぬし、そう信じている。ところがゴールズワース判事やシャドウズの指導者には同じように接近することはできない。彼らは、運命つまりグレイダスを導き、支配する者たちであり、キンボートにも理解できない、畏れの対象と言える。グレイダスに対してするように、彼らの内に入り込み、彼らを知ったかぶりすることはできない。それが両者の間の距離であり、語りの違いとなって表れるのだろう。キンボートはゴールズワースのことをほとんど知らないし、またゴールズワースにそっくりのシャドウズの指導者という、運命の支配者のことを、知ってはいないのである。彼は運命の支配者たちの不可知性と気の遠くなるほどの遠さ、あるいは自分の彼らに対する無知と無力さを認めているのだ。

自分の運命を体現するグレイダスはこれ以上ないほどクローズアップして語り、その「運命」を動かす者である判事と指導者は極めて遠くに描く。近距離の語りには軽視と傲慢が、遠距離の語りには畏れと恐怖（敬意というよりも）が表れているようだ。

さて、グレイダスというキンボートの運命を動かすもうひとつのエンジンは、シェイドの詩であった。つまり、グレイダスの動きを左右するのはゴールズワースであり（ジャック・グレイを精神病院に送って恨まれている本人）、シャドウズの指導者であり、同時にシェイドでもある。そして判事とシェイドは顔がそっくりだと評判であった。これらのことをつなぎ合わせて考えると、シェイド役の役者はラヴェンダーの役（声）だけでなく、ゴールズワース判事の役も演じることになり、そうなるとシャドウズの指導者の役もやはり彼で、つまり一人四役を演じることになるのではないだろうか。こうして、見えなかった三人の顔にはなんとなく見当がつき、見えすぎていた一人は限りなく透明化して行くというわけである。

註

- 1) Nabokov, Vladimir. *Pale Fire*. 1962. London: Penguin, 1991.
以下、この作品からの引用はすべてこの版により、ページ数は本文中かっこ内に示す。
- 2) Nabokov, Vladimir. *The Gift*. 1963. New York: Vintage, 1991.
- 3) Dolinin, Alexandr. "The Gift". *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. Ed. Vladimir E. Alexandrev. Garland Reference Library of the Humanities Vol. 1474. New York: Garland, 1995. pp. 135 - 169